四谷学院

第12章　難民

DATE 5・25・水 NO.

〈疑問〉

・難民認定をされた難民はどのような対偶を受けるのか
　又、難民認定されなかった難民はどうなるのか
・難民認定の具体的な基準は国際的に決められていないのか
・ドイツなど、難民受け入れ国にも人気の国とそうでない国があるのはなぜか
・難民が受け入れ先の土地や人々に与える影響、変化はどのようなものか

〈感想〉

・スムーズな難民申請の完了には、具体的な"難民"の定義が必要ではないかと思ったが、"難民"をどう定義するかは非常に難しいと感じた
・イスラム国の勢力拡大は、難民問題における安全保障の側面をさらに解決困難にしていると感じた
・難民にとって、元いた「故郷」が最も理想的であるという考えは、自分も無意識にもってしまっていたので、受け入れ先で新たなアイデンティティを確立しているという報告は驚きだった
・難民受け入れに対する否定的、嫌悪的感情を緩和するには、"国民国家"という考え方を変化させる必要があるのではないか

No.

Date

・PP192−193
難民が軍事問題から人道的支援の対象になり、ここにおいて国際的理念の実現へ向けた論点が含まれているという表記があったけれどどういうことかなと思った

・P194 難民レジームの中心が北側に移ったとあるけれど、北側とは？
なぜ北側にうつったのか

・P.198 通訳者を入れることによって問題が拡大するケースがイメージしづらかった
単純に言語のニュアンスの違いの問題なのか、もっと他の問題なのか

・P.200−201
確かに難民の名付けは行政によって行われるから、恣意的に民意が操作されているようにも思えるけれど、本当にそれだけかなと思った
国の中の人達も、他の国の報道とかを見たりもするだろうから
それだけではないのではと思った

難民問題において難民の認定が当事者ではなく他者の認識によって決定され、さらには政治的な権力や問題に左右されることが現代的特徴として挙げられていたが、自国で政治的迫害を受け逃れてきた難民が受け入れる側の国の事情でまた排除されるといったことで負の連鎖が続いてしまい、難民問題を悪化させるサイクルが見える。
この際、受け入れる側の国が難民に対して偏った考えを持つことにより難民への待遇などがひどくなったり排除されたりといったおそれがある。例えば難民を受け入れることによって自国の価値観や文化が破壊されるといった考えをもつ国や人々も少なくはないと思うが、難民を受け入れることで国全体としてそういうものがゆらぐということは考えづらい。
むしろこれから考えていくべきことは、難民は世界のいろいろな地域からでてきているので、1つの国がどうするという問題ではなく、世界各国が連携していかに彼らを守っていくか、そしていかに受け入れる国の中で彼らが溶け込みやすい、生活しやすい環境を整えていくかである。
そのためにも彼らが難民として外国に来てどのような生活を望んでいるのか、ホスト社会に対してどう考えているのかを知り、受け入れる側の考えている難民とどのようなギャップがあるのかを理解していく必要がある。

1576606c

濱口 理恵

第二次世界大戦から今まで、難民はその立場の弱さから、受け入れ側やその規格を作る側に恣意的にラベリングされてきた。以前は突発的事象とされていた難民の発生が時を経て恒常的なものになるにつれ、「難民」とそれ以外の峻別が困難になり、その振り分けが政治的意味を帯びて、国際社会にとって否定的な意味を持つようになってきた。ここまで常に不足していたのは、難民当事者の視点である。

当事者の立場を代弁する点で、公共人類学は難民問題に大きく寄与できる。当事者の視点が欠けたところから見る難民問題は、故郷の喪失によってアイデンティティが根こそぎなくなってしまうという心理的解釈や、難民はひとつの文化を持っている本質主義的見方をするのが通例であった。しかし、実際に現地に入って研究をすると、難民の生活が独自の世界観に支えられており、トランスナショナルなネットワークで世界各地の親族等とつながっていることがわかったのである。公共人類学の特性を生かしながら、難民たちの人権に配慮をして研究をすすめ、今後も拡大していくであろう難民問題にどう貢献できるかが今後の課題であろう。

1596605C 橋本瑞木. (5/25)

12. 難民.

日本では難民申請を出した人が厳格な審査により「難民」と認定されるまでにはかなりの時間がかかると聞いたが、少子高齢化の中で人手不足という問題に直面している企業が多くあるそう。のため、今後の日本は難民を受け入れることを避けられないと思います。しかし、難民に対する世間の捉え方はあまりにも主観的で、特に難民の中にテロリストがいないかという心配を持つ人も少なくないです。こういう古い見方をどう見直せば良いのか、難民の受け入れにどう向き合えば良いのかが今後の日本社会における大きな課題の一つだと思います。

1496642C
吳芝螢

民俗学

NO.

DATE 2016・5・25

難民問題は現代の社会において、世界的に大きな問題となっている。様々な理由から母国を抜け出し「先進国」から難民として認められるように求める人々、すでに保護されている人々など数えきれないほどいる。この解決を目的にして難民たちと同じ視点から調査をしようとする文化人類学者たちの存在は重要であると感じる。難民として認める先進国だけでは難民たちの意見などを把握することはできないだろう。外からの目だけでなく内からの目も必要である。内からの調査はこの問題の根本的な原因や、解決へと導いてくれるであろう。しかしながら、調査を受ける側の難民からすればどうであろうか。先にもあった通り、調査は人権をおかさないように進めなければならない。しかしながら、調査されるということは他と違う特別なことがあると意味し、難民たちは普通とは違うものとみなされていると感じたり、人権をおかされていると感じるとしてもおかしくはないだろう。だが、内からの調査なしには問題の解決とはいかない。一方的な調査ではなく、難民たちの協力を得た上で、さらには相互的になんらかの利点がある調査が必要であると私は考える。いつもなら、解決法や対策を考えるところを、調査という段階で考えることができ、非常におもしろかった。調査により対策がとられ、解決へと向かっていくため、人類学の調査は難民問題において非常に重要なものなのである。

NO.

DATE

1506594C

冨田 燎平

民族学　12章難民　コメントペーパー

・幅広い分野に貢献できる「人類学」という話がたびたび出るが、そもそも「人類学」についての知識が圧倒的に足りていないために、納得も反論も難しいと思った。何が人類学的な要素で何がそうでないのかについて、まず理解する必要があると感じた。

・「人権」、「社会正義」といった、人によってどうとでも取れるような言葉が使われていたが、その説明があまりなかったため、あまり理解できなかった。細かい説明をあえてしていない、ということも考えられるが、説明がないために文章全体が表面的な一般論のようなものに感じられた。

民族学

2016/05/25

難民

近年、ヨーロッパを中心に移民、難民に関する問題が顕著に露呈している。移民、難民の流入が増えることにより、労働状況や社会保障の変化につながり、国民国家、国家のアイデンティティが危機にさらされている。この問題をいかに考えるかは国際社会全体の課題であることは間違いないだろう。まず、難民というのは誰の、どういう視点から考えることが大切だ。難民の認定は当事者の証言ではなく、他者の認識によって決定されるという本質的構造が国際法上にあり、そこにはさらに認定する国の政治性が絡んでくる。意図的、恣意的判断が入ってくるのは間違いない。政府に認定されるかされないかで同じような状況にあっても「難民」と「不法移民者」とでは大きな差が出てくる。ここで大事になるのは、難民の声なき声に耳を傾け、ローカルな視点でとらえ、同時に動態性の中でとらえなければならない。

15/6 354C

坂倉 治行

民俗学　コメントシート

2016年5月25日

（12）難民

・本文中で、「難民をもといたところへ送還するのがもっと良い方法だとする考え方」が批判されています。もといた場所が仮に戻れるような状態になった場合でも、やはり難民の人々をもといた場所に送還することはいけないのでしょうか。仮に新しい土地で新しいアイデンティティを獲得できた人たちがいたとしても、それは新しい土地にうまく適応できたからで、新しい土地に適応できず、難民の人自身が故郷へ戻りたいと望んだ場合でも、送還することは間違っているのでしょうか。それよりも、新しい土地に適応できるように支援した方が、彼らにとっていいのでしょうか。

[illegible]
1516585C

難民の章を読んで、公共人類学においてこの問題の「公共」をどう設定するかということが、難民自身や受け入れ国だけでなく、現在の国民国家の枠組みを超えた国際的理念に深く関わってくるのか、ということが良く分かった。難民レジームは国際的体制であるのに、難民申請を受理するかどうかというのが、受け入れ国の都合で一方的に決められてしまう現実は、とても矛盾があるように感じる。本文に、"難民および難民概念は歴史的社会的産物であるが、その点に文化人類学はまだ切り込んでいない"とあったが、どのようにまだ切り込めていないのかが疑問に思った。21世紀において、受け入れ国は行政管理として受け入れを厳しくしているところが多いが、日本は特に申請数に対する許可数が圧倒的に少ないので、難民問題に関する公共人類学の研究が、日本で生かされるべきだと思う。この本には、受け入れ国において庇護希望者が排除されがちとあったが、こういう否定的意味はどうしたら少しでもなくなるのかが知りたい。

1486620C 安井 [illegible]帆

12 難民　川上郁雄

今回の文章を読む上で大切なのは難民の捉え方であったと思う。今日多くの場面で難民問題という言葉は耳にするが、難民とは誰か？どうして発生するのか？という点が曖昧で、議論する度に定義づける必要がある。むしろ、「難民とは何か」を問うことこそ難民問題を考えることだとすら思っていた。しかし、難民問題は、私の考えていたよりずっと複雑で、さまざまなセクターと関わり合った問題であった。

難民問題は、文化人類学というよりはむしろ国際関係論や政治学等の分野に所属しているものではあると思うが、ここであえて人類学的視点を持ち出すことは、より当事者に寄り添い具体的な難民の生き方に接近する研究であると感じた。

一口に難民といっても言い表しきれないほど様々な難民がいると思うが、難民になることによって生まれる新しいコミュニティや難民としてのアイデンティティのようなものがあるのだろうか。

15865810 田中 實野

12. 難民

・難民問題の複雑さとして「難民の認定は他者によって決定される」という内容に制度の限界を感じる。難民を受け入れる側の思想や政治が大きく反映され、難民問題という人権に関わるような問題でさえ政治的手段に使われてしまうと考えると難しい問題だと思った。

・難民がもと住んでいた土地を完全に離れるために、文化的背景を完全に失ったという見方は人類学者側からの偏った見方であり、実際には新しい文化を構築していくものだということに気付いた。

15466616C

古川 美野里

P190. 難民の認定には時の為政者の権力行使と密接に関わるという政治性があるとあるが、
これを避けることのできる方法はあるのだろうか。

P191. 「ホームグロウン・テロリズム」の現象とは何か。

P195. 日本社会は不動で、適応するのは難民だと捉える公共概念があるとあるが、
この捉え方は何が悪いのか。

P194. マルキーが主張した、文化人類学者が、政治課題、戦争、平和、世界秩序の
あり方に対する新しい考え方とはどんなものか。

『公共人類学』第１２章　難民

難民問題に対する文化人類学の視点を通した研究として、難民の人々が強制移住により居住地が移され集団が分割されることで彼らの伝統的な習慣や宗教的な儀礼が失われることとそれに対する援助が考えられたが、本文ではこのような考え方は本質主義的であり難民問題の公共領域を捉えられていないとしていた。強制移住によって親族などの集団が切り離されたとしても移住した場所から彼らのネットワークを通して繋がったり、移住した場所で新たに文化的アイデンティティを構築したりする場合もあり、自分の視点自体が西洋的視点に基づいていることを感じた。公共人類学の視点に立った研究を通して、親族関係などに基づいて難民キャンプ内のソマリア難民を世界各地に逃れたソマリア難民が送金によって支えるネットワークが形成されていることや、日本に暮らすベトナム難民も彼らのネットワークを持ち、彼らの生活がベトナム本国の政治状況や他のベトナム難民の状況に影響を受けていることを明らかにした。重要なのは、これらの研究によって明らかになった事実と彼らへの援助を結びつけることであると思う。例えば、本国の政治状況や他の難民の状況といった情報を手に入れやすくするための支援など、当事者に直接聞くことで得られた調査結果を援助に反映させることができれば、彼らにとって最も必要な支援になる。難民問題では「難民を受け入れている国」の負担や支援の必要性が大きく取り上げられることが多いが、これは当事者である難民や彼ら自身の意見とは別の領域の問題であって、根本的に考えられるべきことは当事者がどのような生活ならば安全に暮らすことができ、そのために何を必要としているのかを明らかにして支援することであると思う。

・難民問題と公共人類学を共に考えたことがなかったが、これらを合わせて考えることで難民自身の視点に立って物事をみることができるとわかった。

・難民問題はグローバルな課題であり、彼らをどのように受け入れていくかということを考えるにあたり公共人類学の見方がとても重要であるとわかった。日本はこれまで比較的閉鎖的であったというイメージが強く移民や難民の受け入れを積極的に行ってきたというイメージもないゆえこの先のグローバル社会で生き残るためにもこれらの問題に柔軟に対応していくことが求められると思った。

5/25 1456577C 中前 菜奈

まず、いくつか質問があるのですが、「サルベージ人類学的アプローチ」がどのようなもので、なぜネガティブな捉え方がされているのかという疑問があります。古い伝統や生活習慣を記録することも対象の人々を理解するのに欠かせないと考えています。次の質問は、Horst [2006] がソマリア難民キャンプでフィールドワークを行った成果として、ソマリア難民が使用するローカル・タームが希望と狂気という両義的な意味が明らかにされたとあるのですが、どういう意味なのかわかりません。3つ目の質問は197ページのところで「脱領域化と脱中心、真正性と当事者性」という論点が具体的にどういった内容のものなのか、ということです。

この章では、難民に対するまなざしが受け入れ国の恣意性やメディアの作り出すイメージでステレオタイプのようになってしまっていて、当事者の視点からの認識を明らかにしようとする文化人類学の重要性が強調されていたと思います。私の問題関心は、この難民に対して文化人類学が提供する知見はどのようにすれば一般の人に広まるのか、というところにあります。人々はメディアから得る刺激の強い情報をもとに、例えば「難民はテロリスト」といった認識をもつこともあると思うのですが、これはどのようにすれば認識を改めてもらうことができるのでしょうか。ワークショップなどが考えられますが規模が小さい等問題があると思います。メディアにはメディアで対抗すればよいでしょうか。

1426542c

佐野 弘樹

第12章　難民

本章第二項　難民問題の捉え方を読むまで恥ずかしながら難民認定の構造は詳しく知りませんでした。受け入れの難しさや難民を主張する（せざるを得ない方々）の増加・認定における困難というイメージのみしかありませんでした。先進国的というか受け入れ国側の視点で難民ないしは移民問題を認識していたのだと感じます。

その上で難民問題における文化人類学的な先行研究の在り方とマルキーの論点は印象的であった。特に第二の論点における、これまでの文化人類学の難民研究への批判の、難民を元いた〜（中略）〜批判する。（P193）は気付かされるものがあった。

難民問題における公共とは何かは非常にむずかしく感じた。

中本 理紗子

1326593C

・誰が難民で誰が国際支援を受ける人なのかを、世論や自国の許容能力を把握し、また難民の人権を守るために積極的に受け入れなければならないという現状は、とても複雑であると感じた。

・文化人類学の難民研究は、機能主義と本質主義によって行われてきたと書いてあったが機能主義的難民研究とは、具体的に何なのか気になった。

国際文化学部 2回
1586502C
朝妻修也

この本の中で、今日の難民問題は国際政治や国際経済、また災害などのグローバルかつ大きな影響要因をリンクしているため、解決に多国間の協力が必要であり、国際社会に課題を突きつけていると示している。
その中で文化人類学は、正規の国に認められた難民だけでなく、審査確定していない庇護希望者や国内避難者など、強制移民にも目を向けるべきである。
その中でマルキーの論点に注目する。人類学的考察が偏っているということについて考える。これまでの人類学的な考えでは、難民を1つの文化をもつ集団としてみなし、彼らが元いた「故郷」こそが彼らにとって理想的な社会であり、アイデンティティが失われるため、元のところへ送還するのが正しいとされていた。
また難民は「北」側の官僚が、その本質を決定でき、日本とベトナムの例にもあるように、勝手に形式化させてしまっている。
このような状況の中で、文化人類学は難民の側に立って、考える必要があると思う。

○ EUでは、各国単位ではなく、地域単位で移民、難民の管理をしていますが、それは良いことなのでしょうか。

○ 本の中では「送還」はあまり良いとは書かれていないですが、実際、「故郷」に帰りたいという人は多いと思うのですが、そこはどうですか。
送還の良し悪しと、難民自身の意見を教えて下さい。
（挿入：フィールドワークなどで得た）

○

No.

Date

1536608 c　東野 雄太

NO.

DATE

難民発生の背景や人権問題，人道的支援に対する文化人類学の研究は，法学的観点や国際支援・人道支援の観点からの研究と比較して少なく，それは文化人類学の長期的で安定的な定点観察を得意とするという特性に難民というテーマがそぐわなかったことに原因があった。しかしアフリカや大量の難民を受け入れた先進国においては難民についての文化人類学的研究が行われるようになり，その中で新たな研究の方向性を示す動きが生まれ，それらの論点は公共人類学としての難民研究について考察するのに必要なものとなっていった。公共人類としての難民研究を行う際，重要なのは調査者の立ち位置であり，特にマッケンジーの議論は難民を研究対象者とだけ見るのではなく，難民の人権をどう確保しつつ研究し，その成果をどのように難民の利益に還元できるのか，という難民研究のあり方と調査者の立ち位置を問うものであった。その中で難民研究における文化人類学は難民に関わるすべての人々に対して公開される「開かれた人類学」であるべきという議論が生まれていった。

難民に関する公共人類学的研究には，次の3点の課題が存在する。第一は，実体とはかけ離れた形で欧米など「北」の政府により難民が捉えられたポリティックスと，その影響下にある難民の人としての主体の生き方を描き出すことである。第二は，「開かれた人類学」としての特性を活かしつつ難民に寄り添い，社会正義のための研究を行うことである。第三の課題は，難民の文化人類学的研究は，すべてにおいて公共性が担保されなければならないということである。これらの課題を克服する中で文化人類学は公共人類学の更なる構築を目指していかねばならない。

NO.

DATE

1546518C

浦田悠布

No.
Date.

難民

難民問題の捉え方について、本書において、難民認定にその時の政権や政治権力、官僚と密接に結びつくものであると述べられている。
移民問題に関しては、外務省、経済産業省、出入国管理局、それぞれに相反する考え方やスタンスを持っていたが、難民に関しては、そのような違いは存在するのか。

領土を前提とする日本のような国民国家において、難民のトランスナショナルなネットワークと向き合っていくことは可能だろうか。移民問題と比較して、難民に特有の困難な問題は存在するのか。

そもそも難民と移民にはどのような違いが存在するのか。両者ともに、政治的な恣意性を持って、判断されるものであるならば、国にとって難民・移民と認定することでそれぞれどのようなメリットがあるのか。

Horstのソマリア難民の研究に関して。実際に、難民に対して行われた、ワークショップでどのような成果が紹介されたのか。それに対する難民の反応はどうだったのか。

No.

Date.

1436533C 小嶋美希

12. 難民

・難民条約の定義にあてはまらない人々（紛争難民など）がいるなかで条約の変更、改正(？)が行われない点が疑問である

・難民という認識自体が歴史的社会的産物という点でその概念以前に似たような状況の人々はどのように理解されてきたのか気になった。

・難民にとっての理想＝故郷
　とする場合何が理想といえるのだろうか、

・日本が、インドシナ難民を受け入れた際の施策で文化人類学が貢献した部分があるのか
　また現状はどう考察されているのか

14565940 檜實花

2016/05/25
公共人類学　コメントペーパー

１２. 難民

●疑問点

・P190 最終行以降、P194 などにもでてくる「難民レジーム」という言葉の定義、用法が、わからないので教えてほしい。

●コメント

・普段から、難民の定義が曖昧であり、その難民の示すところによって問題は大きく異なると考えていた。そのため、この論文では定義がしっかり述べられていたので、わかりやすく納得して読み進めることができた。この論文では、「肥後希望者や、…国内避難民などもおり、…含めて難民問題を考えていくことが必要である。」(p190) としている。しかしながら、やはり難民と聞くと国外避難民を想定するような、ある程度のステレオタイプ的なイメージを伴っており、この論文全体としても、国内避難民を想定する記述が少ないように感じた。

・国外避難民に関して述べれば、彼らは、ある国家から抜けた状態であり、また、どの国にも受け入れられないとすると、彼らはどの国家にも所属しない、宙に浮いた状態である。その彼らを守るものとして「公共」という概念が登場するのではないかと考えた。ただ、そのような状況を、国家に所属しない=「アイデンティティ、文化、エスニシティ、伝統といったものが失われる」(p193) と考えるのは、ここでも批判されているように、国家に帰属意識を持つ立場からの意見である。彼らのアイデンティティ、文化、エスニシティ、伝統は必ずしも国や民族といった「故郷」から作られるものではなく、また、変化しうる動的なものだという認識が不可欠だと考えた。

・ベトナム難民などのネットワークについて「トランスナショナルなネットワーク」(p197) という表現があるが、もはや彼らにとって nation という概念は重要ではなくなっていると考えた。その点において、「トランスナショナル」という表現は、難民側にたった表現とは言い難いのではないか。

国際文化学部 現代文化論講座

1446510C

伊藤実紅

〈難民〉 5月25日 民族学

・難民問題に対して公共人類学が果たす役割は大きいということが本章で一貫して言われている。その点については同意できるが、難民問題については難民の視点、ホスト国の視点、難民発生国の視点を様々な学問が研究する必要があると感じた。学問によって問題の切り口はちがい、難民の視点ばかりを強調しても、はたして問題解決につながるだろうか。本章でも何度も書かれていることだが、これは国際政治上の、国際経済上の、問題である。つまり難民にとっては抗えない大きな力の作用により、今の状況になっているのだ。そのため、何故その原因が起ったのか、という研究が優先されるべきではないだろうか。もちろん難民の視点の欠如による、そもそもの問題設定のまちがいも起こりうる。ただどこに特に力を入れるかを考えた場合、学問の公に影響力を持つという強みを活かして、問題の根本的解決、早期解決を達成できる点に力を入れるべきだと思う。

・難民概念が時勢により書き換えられるというのが興味深い。国民国家は合理的存在であり、国益を最重要視すると考えるならば、国民国家が今後解体に向かうならば、難民問題はどうなるのだろうか。霧散するのか、それともより混迷し、無秩序をもたらすのか。おそらくまだまだ今の国家形態は存続するだろうが、難民の存在が、その形態を弱体化させると思う。

「難民」について

「誰かを難民と呼ぶのか、あるいは収容される人々は誰に難民と呼ばれるのか」という問題は、最近から俎上に乗った話題であるに違いない。特にヨーロッパ、現在の世の中で、難民をめぐって大きな騒ぎが起き、二つの対立した意見が見らえる。移民や難民と地元の人々との間に生じた溝をどうやって埋めればいいのか、お互いの憎悪に火を付ける行動をどうやってとめればいいのかなどの問題解決を、最優先に置くべきだと思っている。

なぜかと言えば、今の状況をそのまま続ければ、暴力犯罪が増えていく恐れがあり、人権侵害被害者の数も激増する可能性が高いからである。迫害を受ける人たちを保護するべきことはもちろんだが、移民や難民にどこまで寛容でいられるか、どこまで助けなければいけないのかというのは問題である。現在のヨーロッパに目を向いたら、その問題の原因がすぐに分かる。言い換えれば、意見や価値観などの衝突は主因である。そのため、地元の人を巻き込んでしまう暴力や強盗などの難民が起こす事件は多発し、難民の受け入れをめぐって物議をかもしている。比喩的に描くとしたら、厚くもてなす主人に自分の意見や考えを強引に押し付けるみたいなシチュエーションだ。その場合、主人が自分の信念を曲げないように対抗するのは当然ではないかと思える。つまり、マジョリティーに反する自分の特権を振り回すマイノリティを、敵と思っている人は少なくないのではないか。お互いに歩み寄り、お互いに安全で充実な生活を送るための条件を付けることは「人間の本質」だとしたら、逆に相手の自由を束縛する行動をどう言えるでしょうか。

私に言わせれば、「公共性」が担保できるための一番大事な条件は、「お互いに大切にする」ことだ。「多文化共生」とは、「一列に並んで同じ形をしているいつかの部分」ではなく、それより「中心部と密接に関係するいくつかの部分」に近いではないかと、私が考える。そのため、違う文化の人を敬意することと同じに自分自身を敬意するべきだと思う。そうしなければ、逆に自分自身が危険にされるのは時間の問題のではないか。

イロナ・マチェイェフスカ
Ilona Maciejewska
158RA07R

・難民認定というのはどのような審査をもとに行なわれているのか。
本当に迫害で苦しんでいる人が認定されず、そこまで苦しんでない人が認定されるということが起こるのではないか。審査において、基準というのが設定されているのか。

・P191, l10~「庇護希望者を第三世界から流出させないようにする排除型のレジーム」とは、「迫害されるおそれ」があると思われる場合にも、認定しない、ということであるのか。

・難民とテロリズムの関係について、国家の安全保障のために難民に対して具体的にどのような政策がなされているのか。

・ホスト社会や国際支援団体の、「難民を元いたところへ送還するのが最もよい方法だとする考え方」(P193, l21,22)においては、難民保護というよりは、難民が元いた地域で迫害されないようにすることが難民に対する支援であると考えている、ということであるのか。
また、なぜこのような考え方がなされてきたのか。

1566565c

鈴原 千絵

2016/05/25
山下晋司『公共人類学』12. 難民

難民に関する人類学的アプローチを考える上での留意すべき点について、筆者は難民認定の構造、難民認定の政治性、難民とテロリズムの関係の3点を挙げている。これらの3点の関わりによって、私たちを取り巻く難民問題は複雑化していると考えられる。1945年以降、ヨーロッパで大量に出現した戦争難民が戦後の経済成長の労働力として歓迎された一方で、テロが起これば、安全保障の立場から移民や難民は一気に管理される対象となる。時の為政者と時代の風潮によって対応が変わるのは至極当然のことのように思われるが、本文のように、公共人類学として難民問題にかかわる調査者の立場として、人権というテーマを抜きには難民問題に取り組むことはできないだろう。もしも、公共人類学が難民を単なる研究対象としてのみ見るならば、政治権力と国際法を土台に難民を管理する対象として扱う見方と大差はないだろう。人道的立場から考えることのできる、公共人類学らしいアプローチの仕方を模索するべきだと考えられる。

また、Peteet のパレスチナ難民の例で彼らの生活世界とアイデンティティが変容するプロセスから、難民を考える上での公共空間を再考したい。難民を送還するのが最善の策だという考えを改め、彼らが新たな生活世界を築ける環境はどのように構築されるのかについて注目する。それは、難民・移民受け入れ国の環境に留まらず、難民の民族性、エスニシティを研究することで明らかになる可能性があるだろう。難民問題において公共人類学はそうした考えを明らかにする必要があり、それによって、現在の政治権力にものを言わせて難民受け入れの可否を問うありかたも変わってくるのではないだろうか。

1426525C 加藤 葉月

5/25

現在の難民問題における注意点として、テロリズムの脅威が市民の大きな感心が寄せられていることであると思う。9.11同時多発テロを境目として、難民の認定が厳しくなっており、更には、それに反発して「難民を受け入れろ！かわいそうだ」とか、「何であの国は難民を受け入れないんだ」といった声も上がっている。こうして、難民をめぐる状況は非常に複雑化していっているにちがいない。

また、この章の2節に『難民の認定は、当事者の証言ではなく、他者の認識によって決定されるという本質的な構造が国際法上ある』との指摘があるが、難民本人達とは次元が違う場所でのイデオロギーの衝突が難民認定を複雑化させていると感じる。

1416601C

細岡 誠太朗

2016.5.25

民族学

12: 難民

- 「難民条約」による難民の「送還.統合.再定住」という処理モデルはどのような立場.研究に基づいて定められたのか?
  (→「戦争難民」にとっては概ね妥当な扱いと考えられていた?)

- 「開かれた学問」とすると誰の立場で、何に貢献するかが生々しく示される。あるグループとの摩擦など、より困難な状況に置かれるのではないか?

1206589C

戸田周作

「難民」

・難民とは西欧の視点から作りだされた歴史的産物であり、難民について考える時に、その人たちの視点立って考えることが欠如しているように感じた。まだまだ難民について深く考え、その人たちの視点に立つことは特にあまり難民に対してなじみのない日本人には難しいかもしれないが、そのような視点から「公共人類学」として考え、普及させていく必要があると感じた。

1286518c

上原郁人

NO.

(12) 難民

DATE 2016. 5. 25

著者が、難民と経済や権力との関係を指摘しているように、
これまでこの問題が難民視点で語られることはなかった。
また、「難民」として一くくりにすることで、個々の問題を見逃して
いるという問題もある。
難民問題は、先進国側の問題なのだ。受け入れるまたは
受け入れないことによって生じるメリット・デメリットが議論される。
しかし、先進国側からの視点だけでは問題の根本解決には
至らないだろう。難民の背景に目を向けない限り、今後も
難民の対応に追われ続けるだろう。
難民の定義やその人権、誰がどのように彼らを守るのか、
何をもって解決とするのか、難民問題には明確にされていない
点がたくさんある。そのためには、公共人類学や他の研究者との
協力の中で、難民の現状と実体をとらえる必要があると感じた。
その上で、難民への関心を世界から集め、各国の利益と結びつけて
行動させる方法を考えることができるだろう。

LOOSE LEAF L1101 6mm×43lines maruman

NO.

DATE . .

1146553c
崎山 千尋

〔難民〕

前回までの章と同様、文化人類学を生かして行くためには、多様な研究機関との関連が重要であることがよくわかる。

難民自身の考えは尊重されていないことは、確かにその通りであると感じる。しかし、一人一人の考えばかりを尊重できないし、テロなどの問題もあることから、難民側と受け入れ側の意見の尊重に関するバランスは大変難しい点であると感じる。

難民とはどのようなものなのかという定義づけと、その文化人類学的なアプローチについて、この章は書かれていた。特に注目した点は、難民に対する人類学的考察、は移民排斥主義なものに帰結しがちである、という指摘である。たしかに同質の文化や同じアイデンティティをもつものと生活していくことを解決方法だとするのであれば、もとの地に帰すことはひとつの解決策となり得るかもしれないし、イコール排斥となるかもしれないが、裏を返せばそれはそうした空間や共同体をどのように産み出すか、確保するかという、受け入れ先の社会への提言にもなり得るのではないかと感じた。もうひとつは、研究対象とするだけでは本質的な解決とは結びつかない、難民は現実の問題であるから、被害者の人権を鑑みながら進められるべきであるという指摘である。難民の問題に限ったことではないが、研究をどのように実益に還元するかという問題と、対象に被害を与えない(悪影響を与える干渉を避ける)ことは重要な視点であると思ったので、注視していきたい。

12、難民

12章では、難民の種類や難民側の事情と受け入れ国の間の"難民"への認識の違いが述べられていた。弱者である難民側の意志が通らず、受け入れ国が都合の良いように難民への世間的イメージを名付けにより操作し、難民への人道的扱いを行えていないとのことだった。疑問を覚えたのは、受け入れ国についての扱いが、あまり良くない点である。難民問題とは書かれているように、難民の出身国、受け入れ国、及びその他多くの国の政治的権力の兼ね合いと人道性とが折り合いがつかないグローバルな問題だ。しかし、自国の治安を守ることだけでなく、これまでの利害関係国との関係維持は、難民に人間への人道的支援と同様に重要である。それを"恣意的"と述べてしまうことは、受け入れ国が難民へ行う名付けと同様のことである。国の力関係で強者を、悪者扱いすればよいというわけではない。このようなささいな点から、一対一ひいては一国対一国などの大きな場面で、言葉の使い方ひとつで、かんちがいが世論をまきこむことを忘れてはならないと感じる。

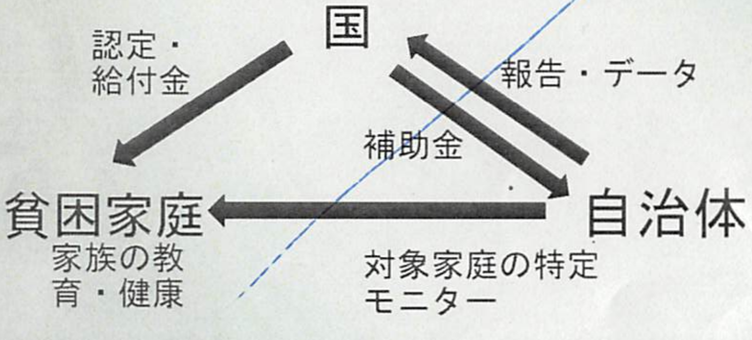
教育が低水準に留まる原因

- 教育を受ける機会費用（教育を受けている間、働いていたとしたら受け取ることができたはずの収入）。年齢とともに上昇。
- 初等教育の質の低さ。
- 教育の収益性の高さにかんする情報の不足。とくに教育を受けていない親の無理解。
- 教育を受ける金銭的費用、移動費用を負担する資金市場へのアクセス欠如（「市場の失敗」）。

教育の需要を増やす条件付き現金給付

- Bolsa Familia（ボルサ・ファミリア）
  - 貧困家庭（家族1人当たり毎月の支出が平均3500円程度）に対して、子供が学校に行き続けることを条件にして、親に現金を給付する（子供ひとりあたり月数千円。対象となる子供の数に上限あり。高校生までをカバー）
  - 2004年にスタートし、現在1400万世帯が受給。5000万人が受益。世界最大規模の社会政策。
  - 就学期間を延ばし、労働市場に出る時期を遅らせる効果があった。
- 今の貧困に対応しながら、家庭の行動を変えて将来の貧困の解決を目指す。支援する社会と支援される個人の共同責任。
- 自治体と国の連携による管理運営。

BOLSA FAMILIAの運営と共同責任



その他エンパワメントの手法

- マイクロファイナンス（グループ融資）
- 中小企業支援・産業クラスター政策
- 生活インフラ整備（水道・電気）
- 就業支援（とくに若年雇用対策）
- 大学入学、公務員採用における人種枠（アファーマティブ・アクション）
- 地域訪問医療活動（特に乳幼児対策）

難民に関する人類学的アプローチを考える際に、国際法上難民の認定は受け入れ国の意思によってなされること、難民受け入れ体制は時の為政者の権力行使と密接関係すること、9,11 のテロ以降それまでの冷戦構造下の難民問題にテロリズムや安全保障や民族紛争等の視点が加わり、国際的な難民レジームの質的変化が起こったことの３点に留意しなければならないと書かれていた。難民問題はグローバルで幅広い分野にまたがった問題だからこそ、そのようなことを考慮して取り組む必要がある。また人類学における難民問題へのアプローチ方法として、長期にわたる難民の視点に立った研究が必要で、難民の人権を守り、難民の同意を得、難民に利益を還元することが重要だと述べられている。これは、従来の人類学の研究法と同じである。このように、従来の手法を保ちながらも他の様々な分野に関わりながら難民問題における公共概念を理解し、他の分野に貢献することで、新たな公共空間を構築することが公共人類学ですべきことなのだと思った。

1516599C

西川 のぞみ

12章 難民

NO. 難民

DATE . .

人道的な観点から移民の申請を無下にすることは出来ない以上、移民受け容れ国が対応に追われるのはある種、仕方のないことではあるが、移民送出国にあたる多くの発展途上国は移民をさせないために努力していることはないのだろうか。また移民があたりまえになり国境という壁が小さくなりつつある世界において、「国」という枠組みの果たすべき役割、そもそも「国」という概念とは何なんだろうと疑問に思った。

〈難民〉

難民を受け入れている国のシステムが未だに不十分であるために様々な問題が現在起こっているが、彼らを送り出す原因となった国の政府はこのような問題に対してどのような措置をとっているのかまた、とるべきであるのか。

また、増え続ける難民に日本は支援を送る以外に難民問題に対して具体的にどのように貢献することができているのか。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-S836BT 6 mm ruled×35 lines

（疑問点）

・P192 西欧的価値観による「援助」のあり方とは具体的にどういうことか？

・P195「日本社会は不動で、適応するのは難民側だと捉える公共概念があるといえよう」とあるが国家として難民を受け入れる際にはある程度の規範を遵守させようとするのが現実だと思うが、今後、「適応するのは難民を受け入れる側のホスト国だと捉える公共概念」が普及していくのか？

（感想）

文中で難民への「名付け」に受け入れ側の政治的事情が大きく関係しており、これにより庇護希望者が排除され、人権擁護の立場に立つ本来の難民の捉え方から離れていくという指摘がなされていたが、だからといって現状ホスト国が難民認定を峻別なく行えば、難民の人権の保障が上手く機能するかどうかは疑問であり、理想と現実の間にギャップがあると感じました。また、「新たな人間理解と社会の構築」の実現は望ましいが、現実的に考えて、難民を受け入れるのは現状国家単位であり、受け入れ側にもきちんとした責任と対応が求められるはずなので難民の「量」と人権擁護の「質」のバランスについても、今後の難民問題を考える上で無視できないポイントになるのではないかと思いました。

難民

難民問題は20世紀から注目されていた。21世紀になって今でも注目されている。特に近年数年ドイツにおける難民受け入れ政策で、難民問題は再び人々の注目を集めた。

2011年に始まるシリア内戦により、難民が大量に現われ、そして彼らはヨーロッパの国々へと逃難した。ドイツは、人道支援と経済助長を理由として難民を大量に受け入れたが、今年初に起きたケルン大晦日集団性暴行事件で、この政策は批評を大量に浴びた。このような問題はおそらくドイツのような難民受け入れ政策だけでなく、移民を大量に導入する政策も同じようなジレンマに陥ると思う。たしかに大量導入すると、経済的に成長するかもしれないが、その反面、国内の犯罪率も上昇する可能性も無視してはいけない。果して難民の大量受け入れは、国にも、難民自身にも良い政策なのか。

Date . . No.

マルキーは「難民を元いたところへ送還するのが最もよい方法だとする考え方」に批判的であると書かれているが、人々のアイデンティティが文化、エスニシティ、伝統に基づいており、移住によりこれらが失われるのは事実で故郷の場所に送還すること以外にこの解決策が見つからない以上具体的な案を出さずにこの考え方を真っ向から批判することはナンセンスだと思った。